

# デーリー東北

2026年(令和8年)3月8日(日曜日) (20)

「ホームムービーの日in八戸」28日初開催

# 家庭に眠るの8ミリ上映

八戸工業大感性デザイン学部の戴周杰助教(たかしゅうき)が、家庭に眠るホームムービーの映像を公募し上映する「ホームムービーの日in八戸2026」を、28日に八戸市の番町サニフイトキャンパス「ほんらぼ」で開く。全国各地で類似名称の上映会が行われているが、八戸では初。8ミリフィルムなどで記録した家族との思い出や懐かしい街並みといった映像を募集し、情報価値の高い地域資源として光を当てる。(佐藤周平)

## 八工大、懐かしい映像募集



ホームムービーの上映会に向けて作品の応募と来場を呼びかける(左から)戴周杰助教、受講生の須藤さくらさん、鈴木春菜さん=5日、八戸市

映像制作とアートマネジメントについて学ぶ同研究室は昨年4月に開設。戴助教が担当する「企画構想演習」のアートマネジメントコースを受講する同年度の2年生11人と、映像制作のゼミに所属する3年生2人が授業の一環で上映プロジェクトの運営を担う。アートマネジメントはアート活動の企画・運営といった「支え手」の役割を担うもの。同コースの受講生は昨年10月、同市の映画上映プロジェクト「白くろの灯」が開いた自主上映会のスタッフを務め、運営のプロセスを体験。この他、デジタル化した情報資源を保存する「デジタルアーカイブ」についても学んだ。今回の上映会は学習の仕上げとして企画した。戴助教は「家族の祝い事や子どもの成長、地元の風景や祭りなど、私的に撮影したホームムービーは時間がたつと貴重な資料になる」と指摘。「庶民の暮らしぶりや今はない建物など、行政やメディアの映像記録でカバーしきれない日常の映像を掘り起こしたい」と語る。公募する映像は地域やジャンルを問わない。1960〜70年代に普及した8ミリフィルムを中心に、家庭用ビデオカメラで撮ったデジタル動画や、写真も含め募集。当日は映像の所有者や撮影者を招待し、当時のエピソードを語ってもらい、観客に感想も聞きながら懐かしい記憶を共有する。上映会の広報を担当する同学部2年の須藤さくらさんは「例えばかつて流行した髪型や服装など、時代の変化を感じるような映像を見て観客と盛り上げられたら」と期待。同2年の鈴木春菜さんは「何気ない日常の風景でも、どういう思い、視点で撮ったのかを本人に聞いてみたい」と話す。当日は入場無料(定員あり、先着順)。午前11時〜午後0時半に8ミリの映写機に触るワークショップ(定員10人)、午後2〜5時に上映会(同30人)を開く。午後は東京や山形県でホームムービーの上映会に携わる関係者を招き、事例紹介を交えたトークも行う。映像、写真の応募は22日まで。問い合わせは上映会の公式メールアドレス「homemovieaday.hachinohe@gmail.com」か、戴研究室「電話0178(25)8163」へ。

※この記事・写真等は、デーリー東北新聞社の承諾を得て転載しています。